

河川工作物と川の変質

ダム事務所主催講演会（96年2月28日）県立大 板井隆彦教授の講演より。

横断工作物：土砂の堆積により川の形態がどんどん変わる。

護岸：三面をコンクリート化すると魚は住めなくなる。

ダムができると

下流では：一般的には減水が起こる。また貯水ダムによって流量が安定しすぎるのもよくない。（下流には土砂が来なくなり、川床は低下する）。濁り水が生ずるので石の表面にシルトが着き、魚の餌である藻類の質が悪くなる。アユ、アマゴ、アカザは特に弱く、太田川の鮎は少なくなるだけでなく不味くなるだろう。

上流では：土砂が堆積して堰堤型平坦化が起こり、瀬（魚の餌が生じる）と淵（魚が餌を取る）との区別がはっきりしなくなる。砂地の底生魚は増えるが、アマゴ、アカザは減る。

上、下流の分断：純淡水魚でも季節移動は行っているのが、障害を受ける。

湛水ダム自体の問題：ブラックバスの侵入と増殖

淡水魚は川ごとに遺伝的に分化している（隔離による変異が非常に進んでいる）。

川を通してしか交流が出来ないので、一旦絶滅すると取り返しようがない（二度と同じものは復活しない）。淡水魚の保護には水系の連絡を絶たないことが大事である。